

生活科・総合的な学習の時間の取組の充実を図るための 附属学校教員と大学教員の協働体制の構築（その4）

藤上 真弓^{*1}・小田 泰督^{*2}・徳永 真衣^{*2}・久保田大貴^{*3}・河村 拓哉^{*4}・
霜川 正幸^{*5}・佐伯 英人^{*6}

A Consideration for Collaboration System
among Three Attached Schools and the Faculty of Education (IV):
To Improve the Quality of Living Environment Studies and the Period for Integrated Studies

FUJIKAMI Mayumi ^{*1}, ODA Taisuke ^{*2}, TOKUNAGA Mai ^{*2}, KUBOTA Daiki ^{*3}, KAWAMURA Takuya ^{*4},
SHIMOKAWA Masayuki ^{*5}, SAIKI Hideto ^{*6}
(Received March 21, 2025)

キーワード：協働体制、生活科、総合的な学習の時間、授業づくり

はじめに

山口大学教育学部では「学部・附属共同プロジェクト」を実施しており、教育学部の附属学校教員と大学教員が連携して共同研究を実践している。筆者らは、この「学部・附属共同プロジェクト」の1つとして、5年間（2018年度、2019年度、2021年度、2022年度、2023年度）、「授業づくり支援プロジェクト」を実践してきた。リーダーは筆者の1人の藤上真弓であり、附属学校教員と大学教員が、生活科・総合的な学習の時間の授業を参観し、授業について話し合い、振り返りを行ってきた（藤上ほか、2019・2020・2022a・2022b・2023・2024）。

近年（2023年度・2024年度）の「授業づくり支援プロジェクト」では、プロジェクトに参加した教員（久保田大貴・徳永真衣）の意識を明らかにし、プロジェクトの有効性について議論した（藤上ほか、2023・2024）。

1. 構成メンバーと役割、研究の目的

佐伯ほか(2021)では、2020年度、山口大学教育学部附属光小学校と山口大学教育学部附属山口小学校の教員間で、理科の授業を公開し、参観し合う取組を行った。この取組を「附属校間における授業」と称した。「附属校間における授業」において、参観した教員が公開授業で実施した手立てをどのように見取ったのか、また、授業者が参観者の見取りをどのように受けとめたのかを明らかにし、「附属校間における授業」の有効性について議論した（佐伯ほか、2021）。なお、佐伯ほか(2021)も、山口大学教育学部の「学部・附属共同プロジェクト」の1つである。

本研究では、山口大学教育学部附属光小学校、山口大学教育学部附属山口小学校、山口大学教育学部附属光中学校の教員間で、総合的な学習の時間の授業を公開し、参観し合う取組を行った。つまり、この取組では2校の附属小学校と1校の附属中学校で実践研究を行った。本稿においては、この取組を「附属校間における授業」と称する。

*1 山口大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻教育実践開発コース

*2 山口大学教育学部附属光小学校

*3 山口大学教育学部附属山口小学校

*4 山口大学教育学部附属光中学校

*5 山口大学教育学部附属教育実践総合センター

*6 山口大学教育学部小学校総合選修

プロジェクトの構成メンバーと役割を表1に示す。本稿では、山口大学教育学部附属光小学校を光小学校、山口大学教育学部附属光中学校を光中学校、山口大学教育学部附属山口小学校を山口小学校と以下に称する。

本研究の目的は、「附属校間における授業」において、参観した教員（光小学校、山口小学校、光中学校の教員）が公開授業で実施した手立てをどのように見取ったのか、また、授業者が参観者の見取りをどのように受けとめたのかを明らかにし、「附属校間における授業」の有効性について議論することである。

表1 プロジェクトの構成メンバーと役割

氏名	所属	役割
○ 徳永 真衣	山口大学教育学部附属光小学校	生活科の実践研究
○ 小田 泰督	山口大学教育学部附属光小学校	総合的な学習の時間の実践研究
○ 久保田大貴	山口大学教育学部附属山口小学校	総合的な学習の時間の実践研究
○ 河村 拓哉	山口大学教育学部附属光中学校	総合的な学習の時間の実践研究
□ 藤上 真弓	山口大学大学院教育学研究科 教職実践高度化専攻 教育実践開発コース	総括、企画・運営、連絡調整、 授業改善指導
□ 霜川 正幸	山口大学教育学部附属教育実践総合 センター	授業改善指導
□ 佐伯 英人	山口大学教育学部小学校総合選修	授業改善指導、調査・分析、効果検証、 論文（本稿）の執筆

○：附属学校教員、□：大学教員

2. 単元の構成と公開授業

2-1 単元の構成

2024年11月29日～2025年2月20日、第4学年の総合的な学習の時間において、単元「今の自分を見つめ、これからの未来を設計しよう」を実践した。単元の内容を『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総合的な学習の時間編』でいうと「児童の興味・関心に基づく課題」（p.75-p.77）に例示されている「・キャリア：実社会で働く人々の姿と自己の将来」（p.76）、「実社会で働く人々の姿と自己の将来（キャリア）」（p.77）に該当する（文部科学省，2018）。この単元は2つの次（小単元）で構成した。単元の時間数は、10時間（1次：8時間，2次：2時間）である。単元の構成を表2に示す。

表2 単元の構成

次	学習の内容	時間数
1	現在（10歳）までの自分の歩み（これまでの10年間）の中で「頑張ってきたこと」を整理する。さらに、自分がなりたい理想の大人像（10年後の自分）について考え、今後の計画（20歳までの未来設計）を立てる。	8
2	自分がなりたい理想の大人像（10年後の自分）や今後の計画（20歳までの未来設計）について、話し合い、これからの自己の生き方について考える。	2 (本時：その2)

2-2 公開授業の概要と事前の準備

本研究では、単元終了時に実践した1時間（45分）の授業を公開授業とした。表2でいうと2次の2時間目である。公開授業の実施日は2025年2月20日（木）であった。学級は第4学年A組（児童数：30名）であり、授業を受けた児童は28名であった。授業者（指導者）は筆者の1人の小田泰督である。

授業で使用したワークシートを図1に示す。また、児童が作成した巻物の例を図2に示す。巻物には、表2の1次で「現在（10歳）までの自分の歩み（これまでの10年間）」を1年ごとに思い出させ、主に「頑張ってきたこと」を整理させて、書かせている。さらに、「自分がなりたい理想の大人像（10年後の自分）」について考えさせ、「今後の計画（20歳までの未来設計）」を立てさせ、書かせている。なお、「今後の計画（20歳までの未来設計）」を平易な言葉で言うと「今後の10年間を、どうしていくのか？」である。本稿では「自分がなりたい理想の大人像（10年後の自分）」を「理想の大人像」、また、「今後の計画（20歳までの未来設計）」を「今後の計画（未来設計）」と以下に称する。

公開授業の前に、教員は下記に示した①～③のことを行っている。

- ① 第4学年のA組とB組の児童に「理想の大人像」と「今後の努力目標」をスプレッドシートに記入させている（書かせている）。このとき、「わたしは〇〇〇な大人になりたいです。そのために〇〇〇のことを頑張っていきます。」という話型を示し、この話型を用いて書かせた。このスプレッドシートのファイル名を『理想の大人像』と『今後の努力目標』とした。A組（児童数：30名）では25名、B組（児童数：30名）では30名が入力していた。公開授業の前には、児童がタブレットPCを用いて、スプレッドシートのアプリを起動しファイル『理想の大人像』と『今後の努力目標』のスプレッドシートを閲覧できるように設定した。
- ② 第6学年の児童（児童数：55名）と光中学校の第3学年の生徒（生徒数：65名）を対象とし、「理想の大人像」について事前にGoogle フォームを使ってアンケート調査を実施した。アンケート調査の質問項目は「将来、どんな大人になりたいですか？」とした。さらに、『わたしは 〇〇〇な大人になりたいです。』という話型を用いて書いてください。』という教示を付加した。このアンケートには、第6学年の児童49名、中学校の第3学年の生徒60名が回答した。アンケート調査の回答は、スプレッドシートで表示できるようにした。公開授業の前には、スプレッドシートのリンクをGoogle クラウドで共有し、閲覧できるように設定した。
- ③ 第4学年の児童の保護者を対象とし、事前にGoogle フォームを使ってアンケート調査を実施した。アンケート調査の質問項目は「どんな大人で在りたいですか？」とした。さらに、『わたしは〇〇〇な大人で在りたいです。』という話型を用いて書いてください。』という教示を付加した。このアンケートには、45名の保護者が回答した。アンケート調査の回答は、スプレッドシートで表示できるようにした。公開授業の前には、スプレッドシートのリンクをGoogle クラウドで共有し、閲覧できるように設定した。これは「自分になりたい理想の大人像（10年後の自分）」ではないが、「理想の大人像」に類する内容であるため、本稿では「理想の大人像」と同じように扱う。

未来に向かって

①

①書いてみよう！伝えてみよう！

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

キーワード

② どんな未来につながっている？

③ 今後、未来に向かって どのように生活していきたいですか。

図1 ワークシート



図2 巻物のようす

2-3 公開授業の内容

公開授業は、以下の3つの学習活動（学習活動①、学習活動②、学習活動③）で構成した。ここでは、学習活動①を『理想の大人像』と『今後の計画（未来設計）』を伝え合う活動、学習活動②を『理想の大人像』について考える活動、学習活動③を「今後の自分の生活について考える活動」と称する。

学習活動①の『理想の大人像』と『今後の計画（未来設計）』について伝え合う活動について以下に示す。

まず、教員は、授業のめあて「理想の大人どうとその先をみつめよう !!」を提示し、ワークシートを配付した。その後、児童に、授業のめあてをワークシートに書かせた。

次に、児童が相互に「理想の大人像」と「今後の計画（未来設計）」を伝え合う場を設定した。「今後の計画（未来設計）」を換言すると「今後、どうしていくのか？」である。その際、前述した巻物（「理想の

大人像」と「今後の計画（未来設計）」を書いている部分）を使って、伝え合うこととし、伝え合った友達からワークシートの「① きいてみよう！伝えてみよう！」にサインをもらうようにさせた。児童が友達に「理想の大人像」と「今後の計画（未来設計）」を伝えているようすを図3と図4に示す。サインをしてもらうようすを図5に示す。

学習活動②を「理想の大人像について考える」について以下に示す。

まず、『理想の大人像』と『今後の努力目標』を書いているスプレッドシートを、モニターを使って提示し、学級全体で確認した（図6）。前述したように、A組（児童数：30名）では25名の児童が、文章で書いている状態であった。

次に、児童一人ひとりに、「理想の大人像」を、キーワード（単語や短文）で表すと「何になるのか？」を考えさせ、ワークシートにキーワードを書かせた。このとき、参考のため、児童一人ひとりにタブレットPCを使わせて、前述した文章（「理想の大人像」について書いたもの）を確認させた（図7）。児童は、タブレットPCを用いて、スプレッドシートのアプリから、ファイル『理想の大人像』と『今後の努力目標』を閲覧した。その後、児童一人ひとりにキーワードを発表させ、教員がそのキーワードを板書した（図8）。

教員は「これらのキーワードは、どんな未来につながっていますか？」と問い、児童に考えさせた。このとき、ワークシートの「② どんな未来につながっている？」に短文で書くように指示した。その後、5名の児童に発表させた。児童の発表は「楽しい未来につながっている」、「ワクワクする未来につながっている」、「幸せな未来につながっている」、「夢が実現する未来につながっている」、「サイコーな未来につながっている」であった。教員は「楽しい」、「ワクワク」、「幸せ」、「実現」、「サイコー」とホワイトボードに書き、黒板に貼った（図9）。このとき、教員は「だれの幸せ？」と問い、児童に考えさせた。児童の回答は「自分のため」であった（図10）。そこで、教員は、1つめのマグネットシート上に「自分」という字をマーカーで書き、黒板に貼った。さらに、教員は「自分だけの幸せ？」と問い、児童に考えさせた。児童の回答は「みんなの幸せにもなっている」や「相手の幸せにもなっている」であった。そこで、教員は、2つめのマグネットシート上に「みんな」と「相手」という字をマーカーで書き、黒板に貼った。

前述したように、授業前に第6学年の児童と光中学校の第3学年の生徒を対象に「理想の大人像」についてアンケート調査をしており、また、第4学年の児童の保護者を対象に「理想の大人像」についてアンケート調査をしている。そこで、同じように、児童一人ひとりにタブレットPCを使わせて、第6学年の児童と光中学校の第3学年の生徒が書いた文章を読ませた（図11）。このとき、自分たちが発表しなかった内容が見つかれば、それをキーワードにさせて、適宜、発表させた。教員は、そのキーワードを板書した。さらに、児童一人ひとりにタブレットPCを使わせて、第4学年の児童の保護者が書いた「理想の大人像」の文章を読ませた。このときも、自分たちが発表しなかった内容が見つかれば、それをキーワードにさせて、適宜、発表させた。教員は、そのキーワードを板書した（図12）。

学習活動③の「今後の自分の生活について考える活動」について以下に示す。

教員は「今後、どのように生活していきたいですか？」と問い、児童に考えさせた。このとき、ワークシートの「③ 今後、未来に向かって どのように生活していきたいですか。」に書くように指示し、書かせた（図13）。その後、3名の児童に発表させた（図14）。児童の発表の内容は「健康に気を付けて、楽しく生活をする」、「困っている人に話しかける。勇気をもつ。やさしくする」、「毎日、小さなことでいいから、楽しいなと思うことを見つける」であった。ここで、教員は「みなさんの幸せにつながっていきそうですね」とまとめ、授業を終了した。



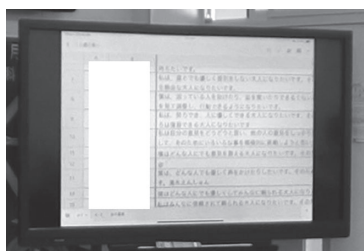
図3 学習活動①のようす



図4 学習活動①のようす

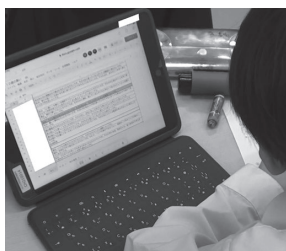


図5 学習活動①のようす



マスク：出席番号と氏名

図6 学習活動②のようす



マスク：出席番号と氏名

図7 学習活動②のようす

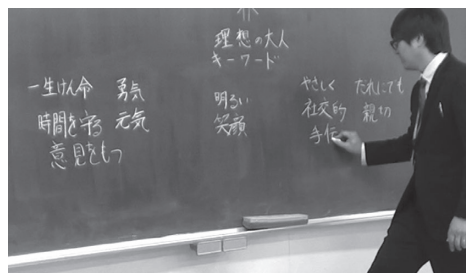


図8 学習活動②のようす

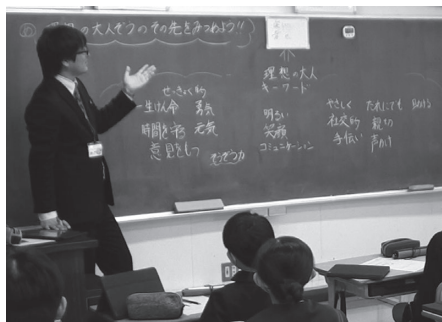


図9 学習活動②のようす



図10 学習活動②のようす



マスク：氏名

図11 学習活動②のようす



図12 学習活動②のようす

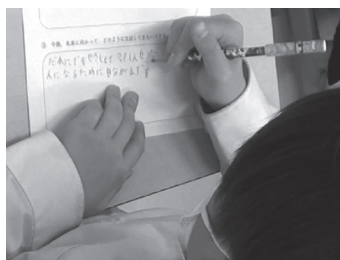


図13 学習活動③のようす



図14 学習活動③のようす

3. 調査の方法

参観者が公開授業で実施した手立てをどのように見取ったのか（公開授業で実施した手立てに対する評価、そのように評価した理由、改善案）を明らかにする目的で「授業の参観記録」を作成した。「授業の参観記録」を表3に示す。「授業の参観記録」では、公開授業で実施した手立てに対する評価を「手立てに対する評価」と称し、また、そのように評価した理由を「その理由」と称した。

表3 「授業の参観記録」

★手立てに対する評価	とても良い	だいたい良い	どちらともいえない	あまり良くない	とても良くない
	【 5	4	3	2	1
【その理由】					
【改善案（私なら～する）】					

参観者は、公開授業で実施した手立てに対する評価を、前述した3つの学習活動（学習活動①、学習活動②、学習活動③）で行った。学習活動ごとに「手立てに対する評価」の5件法（5：とても良い、4：だいたい良い、3：どちらともいえない、2：あまり良くない、1：とても良くない）で回答した（あてはまる番号に一つ〇を付けた）。さらに、そのように評価した理由を「その理由」に記述し、改善案を「改善案（私なら～する）」に記述した。この「授業の参観記録」への記入は、公開授業を参観した後に行った。

授業者は参観者が記入した「授業の参観記録」を読み、思ったことや感じたことなどを記述した。この記述を「授業者の考え」と称する。

分析するにあたっては、「授業者の考え」の記述をもとに、授業者が参観者の見取りをどのように受けとめたのかを読み取り、「附属校間における研究授業」の有効性について議論した。

4. 分析の結果と考察

4-1 光小学校の徳永真衣の「授業の参観記録」

光小学校の徳永真衣の「授業の参観記録」を表4～表6に示す。

表4 参観者（徳永真衣）の「授業の参観記録（学習場面①）」

<p>【学習活動①について】</p> <p>★手立てに対する評価：2</p> <p>【その理由】</p> <p>導入時、すぐに授業のめあてを提示し、ワークシートを配付して書かせていた。子どもが、巻物に書いた「理想の大人像」と「今後の計画（未来設計）」について、友達と交流したいと思わせる手立てがなかったと感じた。</p> <p>また、巻物を使って他者へ話すことについても、目的意識がなかったように感じた。</p> <p>【改善案（私なら～する）】</p> <p>巻物について話したい、伝え合いたいという手立てをしてから、本時のめあてを提示すると良いと思った。例えば、教員が「自分の体験談」を話す。私（徳永）の場合、「10歳の頃、『人の役に立つ大人』を目指した。そのため、勉強をすることを計画して取り組んだ。しかし、コミュニケーション力の向上には意識を向けていなかった。そのため、大人になって後悔した」という体験談を話す。その後、「巻物に書いた『今後の計画（未来設計）』を実行すれば、10年後、『理想の大人像』になっているのでしょうか？」と問いかける。そうすることで、子どもが巻物に書いた「理想の大人像」と「今後の計画（未来設計）」について、交流して確かめたいようにさせる。また、この手立ては、巻物を使って他者へ話すことについて、目的意識をもたせることにもつながる。巻物に書いたことについて、他者から評価を受けるために、巻物に書いた内容を伝える必然性が生じるからである。つまり、巻物を使って友達に話す目的は、他者から評価を受けるためであり、感想を聞くためである。こうすると、子どもは交流したいと思い、また、話す目的も明らかになると思う。</p>

表5 参観者（徳永真衣）の「授業の参観記録（学習活動②）」

<p>【学習活動②について】</p> <p>★手立てに対する評価：2</p> <p>【その理由】</p> <p>子ども一人ひとりが、「理想の大人像」をキーワードにして発表した。キーワードを挙げた根拠を述べてなかった。そのため、子どもは、他者が発表した「理想の大人像」のキーワードに理解を示すことはできても、それ以上は深まらず、その「理想の大人像」に共感するといったようすはみられなかった。</p> <p>【改善案（私なら～する）】</p> <p>子どもにキーワードを挙げた根拠を発表させる。具体的にいうと、「どうして、そのキーワードにしたのか？」と問い、子どもにキーワードを挙げた根拠を、体験や経験を伴って話させる。そうすると、話を聞いた子どもが、そのキーワードに共感できると思った。また、教員は、子どもが巻物を書いている過程で、子どものキーワードの背景（根拠）を知っているはずである。そこで、教員は「キーワードの理由を発表できる人？」と問い、子どもが挙手した際に、意図的に指名をして、聞かせると良い背景（根拠）を発表させる。こうすることで、キーワードに対する共感をより深められたと思う。</p>
--

表6 参観者（徳永真衣）の「授業の参観記録（学習活動③）」

<p>【学習活動③について】</p> <p>★手立てに対する評価：2</p> <p>【その理由】</p> <p>学習活動①で、子どもは、巻物を使って、友達に「今後の計画（未来設計）」を伝えた。その内容と、学習活動③の「今後、どのように生活していきたいですか？」という問いに対する子どもの回答の内容がほとんど同じで違いが見られなかったため。また、学習活動②で子どもが発表したキーワードと、学習活動③の問いに対する子どもの回答も同じようなものであったと感じた。</p> <p>【改善案（私なら～する）】</p> <p>学習活動②で、私（徳永）が提案した改善案を実施したという前提で、学習活動③で以下のことを行う。学習活動③では、子どもに「学習活動②で友達と交流した『理想の大人像』のキーワードの中で、自分の『理想の大人像』に取り入れたいと感じるものはあったか？」と問いかける。その後、自分が新しく取り入れた「理想の大人像」や「今後の計画（未来設計）」について、自分の巻物に書き加えさせたり、シールに書いて貼らせたりする。そうすることで、自分自身の「理想の大人像」と「今後の計画（未来設計）」について考えを深められると思う。</p>

4-2 山口小学校の久保田大貴の「授業の参観記録」

山口小学校の久保田大貴の「授業の参観記録」を表7～表9に示す。

表7 参観者（久保田大貴）の「授業の参観記録（学習活動①）」

<p>【学習活動①について】</p> <p>★手立てに対する評価：3</p> <p>【その理由】</p> <p>巻物を使って「今後の計画（未来設計）」に着目させ、交流させたことは良かった。ただし、「理想の大人像」と「今後の計画（未来設計）」を相互に伝えただけになっていたのでは、話し合いにならず、検討の余地があると感じた。</p> <p>【改善案（私なら～する）】</p> <p>「理想の大人像」と「今後の計画（未来設計）」を伝え合う際、教員は交流の視点を事前に示す必要があると思う。話を聞かせる時は「本当に『理想の大人像』に向かうための『今後の計画（未来設計）』になっているか？」を考えながら聞くようにさせる。話を聞き終わったら、「なぜ、〇〇する必要があるのか？」といったことを質問させ、その場で応答させる。そうすることで、友達と巻物を使って交流する意味が生じ、話し合いが深まると考える。</p>

表8 参観者（久保田大貴）の「授業の参観記録（学習活動②）」

<p>【学習活動②について】</p> <p>★手立てに対する評価：3</p> <p>【その理由】</p> <p>キーワード化させることは重要であると考えていることをキーワードにさせることで、子どもが大切にしている価値観、つまり、「理想の大人像」が明確になると考える。しかし、キーワード以外のことが語られなかったため、それ以上の深まりがみられなかったと考える。</p> <p>【改善案（私なら～する）】</p> <p>キーワードといっしょに「どうして、そのキーワードを大切と思ったのか？」といった根拠（理由）を話させる。すると、子どもが、自分が「理想の大人像」としたキーワード以外に、さまざまなキーワードがあり、また、その根拠（理由）を知ることができる。そうすることで、子どもは「自分のキーワードとして、他の人のキーワードも取り入れようか？」と思うことができるようになる。私なら、別の価値観（「理想の大人像」）にふれさせ、それを取り入れるかどうかを考えるという学習活動を仕組む。</p>
--

表9 参観者（久保田大貴）の「授業の参観記録（学習活動③）」

<p>【学習活動③について】</p> <p>★手立てに対する評価：2</p> <p>【その理由】</p> <p>学習活動②までの子どもの思考の流れと文脈がつながっていなかったように感じた。学習活動②では「理想の大人像」をキーワード化し、「どのような未来につながっているか？」を考えさせている。学習活動③では「今後、どのように生活していきたいですか？」と問うている。このことに違和感がある。子どもの発表をみると「楽しく」、「勇気」、「やさしく」といったキーワードをつないで話しているだけになっている。上記の問いをして回答を求めても、これまでの学習活動を通しての変容がみられたり、考えの強化が行われたりしないと感じた。</p> <p>【改善案（私なら～する）】</p> <p>学習活動②では、他者のキーワードとその根拠（理由）を聞く学習活動を行い、「新しく取り入れたいキーワードがないか？」を考えさせる。学習活動③では、「どうして、そのキーワードを取り入れようと思ったのか？」や『「今後の計画（未来設計）」をどうするか？』を考えさせる。そうすることで、具体的な行動指針である「今後の計画（未来設計）」の変更などを記述することができる。学習活動を通して、子どもが自分自身の変容に気付けるようにしたい。</p>

4－3 光中学校の河村拓哉の「授業の参観記録」

光中学校の河村拓哉の「授業の参観記録」を表10～表12に示す。

表10 参観者（河村拓哉）の「授業の参観記録（学習活動①）」

<p>【学習活動①について】</p> <p>★手立てに対する評価：4</p> <p>【その理由】</p> <p>「理想の大人像」と「今後の計画（未来設計）」が書かれた巻物を使わせて対話させることに意義があると感じた。この手法を用いると、子どもが、これまでの学習活動を踏まえて、考えを見つめ直す機会にできると感じた。しかし、巻物を広げることが難しく、話し合う上での障害になっていた。また、多くの友達から「サインを集める」という目的で行動していたため、対話の人数を多くしようとしており、それが交流を深めるという視点からいうと障害になっていた。</p> <p>【改善案（私なら～する）】</p> <p>サインを集めさせるのではなく、机上に巻物を置いて広げ（「理想の大人像」と「今後の計画（未来設計）」が書いてあるところを広げて）、それを見ながら、子ども同士がじっくり話し合う場をつくる。「理想の大人像」をキーワードにする活動を、この学習活動①で交流を通して行うようにする。例えば「発表者は、巻物を使って『理想の大人像』と『今後の計画（未来設計）』を説明する。聞く人は、発表者のキーワードを考えて探る」といった活動にすれば、自分が説明した内容と友達の受け止め方の異同から、いろいろな考え方があることに気付き、自己の生き方について考えを深められると思う。</p>
--

表11 参観者（河村拓哉）の「授業の参観記録（学習活動②）」

<p>【学習活動②について】</p> <p>★手立てに対する評価：3</p> <p>【その理由】</p> <p>それぞれの子どもがキーワードを発言していくことで、たくさんの情報の中にどのような意見があるのかを知ることにはつながった。しかし、アンケート結果など、資料を見る時間が十分になかったように感じられた。「どんな未来につながっていますか？」については、子どもにとっても考えがいのある話題であり、子どもはそれぞれの思いをもっていることをうかがい知ることができた。しかし、子どもが「どんな未来につながっているのか？」について、十分に深めることはできなかったと感じられた。</p>

【改善案（私なら～する）】

この授業を実践する前に、小学校6年生、中学校3年生、保護者のアンケート結果を、子どもたちに読み込ませ、分析させる。そうすれば、子どもが多様な価値観（「理想の大人像」）にふれることができたと思う。本時の授業で、子どもが、多様な価値観があるということを理解した上で話し合うことができれば、考えを深められたと思う。

表 12 参観者（河村拓哉）の「授業の参観記録（学習活動③）」

【学習活動③について】

★手立てに対する評価：2

【その理由】

これまでの学習を踏まえて考えをまとめる時間が十分にとれなかったように感じられた。子どもは、十分に考えを深める前に「今後、どのように生活してきたいですか？」と問われ、それについて考え、書くことになっていた。

【改善案（私なら～する）】

これまでの学習を踏まえて（子どもが、多様な価値観があることを理解した状態で）、最も大切と思うキーワードを1つ決めさせる。学級内で異なるキーワードの友達を見つけさせ、そのキーワードを選んだ理由について対話をさせる。その後、「キーワードを変更するか？」と問い、キーワードを変更した子どもに、変更した理由を話させる。キーワードを選択した理由を話し合うことで、子どもの価値観（「理想の大人像」）をゆさぶることができると思う。さらに、キーワードを変更した理由を話させることで、子どもが自分の変容に気付くことができると思う。

4-4 「授業の参観記録」を読んだ「授業者の考え」

「授業の参観記録」を授業者（小田泰督）が読み、考えたことを表13に示す。

表 13 「授業の参観記録」に対する「授業者の考え」

【学習活動①について】

徳永先生は「巻物に書いた『今後の計画（未来設計）』を実行すれば、10年後、「理想の大人像」になっているでしょうか？」と問いかけることを提案された。また、久保田先生は「本当に『理想の大人像』に向かうための『今後の計画（未来設計）』になっているか？」を考えながら聞き、その後、「なぜ、〇〇する必要があるのか？」といったことを質問させることを提案された。これらを行うことで、友達と交流する意義が深まると考えた。さらに、その前段階で、徳永先生は「教員が『自分の体験談』を話す。」を行うことを提案された。こうすることで、子どもは「自分が巻物に書いた『今後の計画（未来設計）』を実践することで『理想の大人像』が実現するのか？」という問いをもち、交流して確認したいと思うようになると思う。一方、河村先生は、「発表者は、巻物を使って『理想の大人像』と『今後の計画（未来設計）』を説明する。聞く人は、発表者のキーワードを考えて探る」という提案をされた。この「友だちの説明を聞いて、キーワードを探る」という活動も有効であると感じた。その場合はキーワード化の例を導入の段階で示すのが良いと考えた。

【学習活動②について】

徳永先生は、子どもに「どうして、そのキーワードにしたのか？」と問い、キーワードを挙げた根拠を発表させることを提案された。また、久保田先生も、キーワードといっしょに「どうして、そのキーワードを大切と思ったのか？」といった根拠（理由）を話させることを提案された。提案のとおり、私は、キーワードの必要性を深める手立てをうっていなかったと考える。そのため、子どもの思考が浅いままで進んでしまったと感じた。提案のとおり、「なぜ、そのキーワードを大切だと思ったのか？」を問い、子どもに根拠（理由）を語らせる場をつくることで、子ども自身、考えの根幹に迫ることができたと思う。先生方が提案されたことを深めるためには、この授業を実践する前に、子ども一人ひとりに、そのキーワードにした根拠（理由）を考えさせておくと、より深められると考えた。一方、河村先生は、授業の実践前に、小学校6年生、中学校3

年生、保護者のアンケート結果を、子どもたちに読み込ませ、分析させることを提案された。実際のところ、学習活動②の中で、子どもが読んだアンケート結果は、さほど多くなかったと思う。提案のとおり、多様な価値観（「理想の大人像」）があることを理解した上で話し合うことができれば、考えを深められたと思う。この授業の前に、小学校6年生、中学校3年生、保護者などに、子どもにインタビューをさせておくといったことも、深める手立てとして有効と考えた。

【学習活動③について】

徳永先生は、友達と交流した「理想の大人像」のキーワードの中で、自分の「理想の大人像」に取り入れたいと感じるものはあったか？」と問いかけ、その後、自分が新しく取り入れた「理想の大人像」や「今後の計画（未来設計）」を、自分の巻物に書き加えさせることを提案された。提案のとおり、取り入れた「理想の大人像」や「今後の計画（未来設計）」を加筆させれば、子どもの考えを「見える化」することができ、子どもの考えの変容を見取ることができる。巻物をつくる意義も深まると考える。久保田先生は、子どもに「どうして、そのキーワードを取り入れようと思ったのか？」や『「今後の計画（未来設計）」をどうするか？』を考えさせ、「今後の計画（未来設計）」の変更などを記述させることを提案された。この方法も、子どもが自分自身の変容に気付くことができる方法の1つと考える。河村先生は、最も大切と思うキーワードを1つ決めさせ、異なるキーワードを選んだ者同士で、選んだ理由を話し合うこと、さらに、キーワードを変更した子どもに、その理由を語らせることを提案された。この方法は、子どもの価値観（「理想の大人像」）をゆさぶることができる方法であり、また、子どもが自分自身の変容に気付くことができる方法の1つと考えた。

【まとめ】

このたび、提案いただいた各改善案について、そのとおりと感じた。この公開授業を通して学んだことを今後の授業づくりに生かしていきたい。

表13の「授業の参観記録」に対する「授業者の考え」について以下に考察する。表13をみると、授業者（小田泰督）が、参観者（徳永真衣、久保田大貴、河村拓哉）の「授業の参観記録」に示された改善案（私なら～する）に同意していることをうかがい知ることができる。「このたび、提案いただいた各改善案について、そのとおりと感じた」という記述からも、そのことを見取ることができる。さらに、「この公開授業を通して学んだことを今後の授業づくりに生かしていきたい」という記述から、今後の授業づくりで活用していくという意識を見取ることができる。このことは、授業者の授業改善につながることを示唆しており、「附属校間における研究授業」の有効性を示しているといえる。

5. まとめ

本稿は、山口大学教育学部附属教育実践総合センターによる「2024年度学部・附属共同プロジェクト～学校危機や困難を乗り越える学部・附属の連携・協働～」に採択された「授業づくり支援プロジェクト」の成果の一部をまとめたものである。本研究では、公開授業を参観した教員（光小学校、山口小学校、光中学校の教員）が公開授業で実施した手立てをどのように見取ったのか、また、授業者が参観者の見取りをどのように受けとめたのかをもとに「附属校間における授業」の有効性について議論した。このたびの「授業づくり支援プロジェクト」の中で行った他の実践研究についても、今後、報告していきたい。また、引き続き、「授業づくり支援プロジェクト」を実践し、その有効性について議論していきたい。

文献

佐伯英人・赤星研・宮崎洸佑・津守成思（2021）：「教育学部附属光小学校の理科の研究授業に関する一考察 - 附属小学校の教員の授業参観をとおして - 」，山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，第52号，pp. 73-79.

藤上真弓・土井裕美・志賀直美・小林弘典・浦田敏明・前田昌平・岡崎智利（2019）：「資質・能力の育成を図る生活科・総合的な学習の時間の授業づくりに関する研究」，山口大学教育学部附属教育実践総合セ

ンター研究紀要，第 48 号，pp. 19-28.

藤上真弓・大塚進真・志賀直美・小林弘典・浦田敏明・前田昌平・岡崎智利（2020）：「資質・能力の育成を図る生活科・総合的な学習の時間の授業づくりに関する研究Ⅱ」，山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，第 50 号，pp. 19-26.

藤上真弓・佐伯英人・徳永真衣・大塚進真・志賀直美・小林弘典・浦田敏明・前田昌平（2022a）：「生活科・総合的な学習の時間の取組の充実を図るための附属教員と大学教員の協働体制の構築」，山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，第 54 号，pp. 45-54.

藤上真弓・大塚進真・佐伯英人（2022b）：「総合的な学習の時間の授業改善に向けた「授業リフレクション」」，山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，第 54 号，pp. 263-272.

藤上真弓・徳永真衣・大塚進真・志賀直美・久保田大貴・浦田敏明・前田昌平・佐伯英人（2023）：「生活科・総合的な学習の時間の取組の充実を図るための附属教員と大学教員の協働体制の構築（その 2）」，山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，第 56 号，pp. 83-88.

藤上真弓・徳永真衣・大塚進真・志賀直美・久保田大貴・浦田敏明・佐伯英人（2024）：「生活科・総合的な学習の時間の取組の充実を図るための附属教員と大学教員の協働体制の構築（その 3）」，山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，第 58 号，pp. 97-105.

文部科学省（2018）：『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総合的な学習の時間編』，東洋館出版社.